

Ancient Gender

古代のジェンダー

～東国文化・上野国・律令国家を通して～

群馬県立中央中等教育学校 3年

小松美羽



返却希望

1.はじめに

Q1. 日本史で、一番最初に登場する人物は誰か。

A1. 卑弥呼

Q2. 大化の改新を行った聖徳太子を、摂政の位に任じ共に政治を行った天皇は誰か。

A2. 推古天皇

Q3. 壬申の乱により荒れた都を再興し、藤原京遷都や戸籍編纂を行った天皇は誰か。

A3. 持統天皇

古代の日本では、多くの女性リーダーが活躍していた。その輝くような業績は、今日まで長く語り継がれている。特に、冒頭の問いで取り上げた3人の果たした役割は大きく、今の日本の礎を築いた人々といっても過言ではない。

では、現代の日本ではどうだろう。2021年に公表された、世界経済フォーラム（WEF）の「The Global Gender Gap Report 2021」より日本のジェンダーギャップ指数（Gender Gap Index）を引用する。この指数は、世界的な男女平等の比較基準となっており、「経済・政治・教育・健康」の4分野のデータから作成されている。0が完全不平等、1が完全平等を示している。日本の総合スコアは0.656、順位は156か国中120位だった。これは先進国の中で最低レベル、アジア諸国の中でも韓国や中国などに大きく遅れをとっている。特に、「政治」の分野では、データ上の数値は「完全不平等」を示す0に近い0.061となり、顕著なジェンダー格差が生じていることが実感できる。

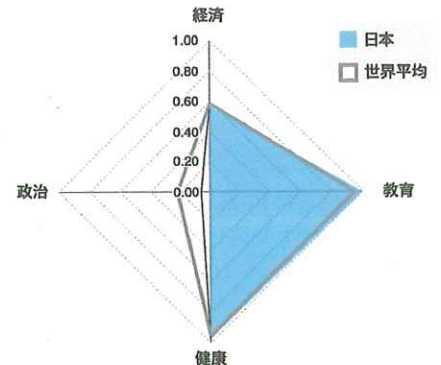


図1 ジェンダーギャップ指数：日本

なぜだろう。かつての日本では女性のリーダーシップは発揮されていたはずだ。いつから、日本の男女平等は失われてしまったのだろうか。いつの間に女性のリーダーはいなくなってしまったのだろうか。

現代社会の抱えるジェンダー格差問題を解決するには、どうしたら良いか。そこで私は、古代社会からジェンダーについて考え、ヒントを貰おうと考えた。「ジェンダー平等」の実現のために、先人たちの知恵を学ぶ。過去と未来の融合だ。

この研究では、古代のジェンダーについて「政治」「経済」「家庭」の3つの仮説と4つの章からアプローチしていく。3要素とも、現在まで共通する生活の柱だ。それぞれの柱のもと、どのような女性がパワフルに活躍していたのか、考古学的観点から、様々な「モノ」をもとに考察を広げていく。

2.上野国の女性 ～埴輪・副葬品はメッセンジャー～

仮説① 光り輝く豊かな大国・上野国には、多くの女性リーダーが存在していた。

上野国において活躍していた女性の存在について調査を行った

(1)地域を治める女性首長

今回私が古代ジェンダーについて研究する動機となった最も大きな要因は、古墳時代についての二つの講演会を拝聴したことだ。

1つ目は、埴輪についての講演だ。講師は、群馬の古墳研究の第一人者として名高い、明治大学教授の若狭徹先生であった。高崎市教育委員会主催の高崎学検定講座として開催された。「埴輪は語る」というタイトルのもと、高崎市の埴輪について興味深い知識を得ることができた。特に、若狭先生が携わられた保渡田古墳群整備についての内容は実に面白かった。保渡田八幡塚古墳の埴輪群像は美しいだけではなく、当時の上野国の社会の様子を示しているのだった。それぞれのシーンに意味があり、生活に関わる水の支配とまつわる儀式や、狩猟を通して三界（水・空・地）に王の権力を誇示している様子など、古墳人の日々の息吹を感じさせた。

講演の終盤、「埴輪とジェンダー」と題して古代の女性首長についての言及があった。その内容に私は感銘を受けた。

高崎市下里見町にある郷見神社の境内には、諏訪山（すわやま）古墳という古墳がある。この諏訪山古墳から出土した埴輪が、ある重大な事実を伝えている。

右の図3は、諏訪山古墳から出土した3体の埴輪だ。

- ・左端→杯を捧げる動作の、首飾りをつけた巫女の埴輪
- ・中央→上げ美豆良（みずら）の、下級の男性（農夫？）
- ・右端→下げ美豆良に冠の、上級の男性



図2 諏訪山古墳出土埴輪

ここで、若狭先生は「埴輪の大小関係に注目」とおっしゃった。最も大きな埴輪は、巫女埴輪である。これは、諏訪山古墳の被葬者が女性・巫女であることを示唆しているというのである。

詳しく説明する。埴輪の大小は、それぞれモチーフとされた人物の階級の関係



図3 綿貫観音山古墳出土埴輪〈国宝〉

と一致することが多い。確かに、綿貫観音山古墳の埴輪群像の一部（図3）では、左側に座り（胡坐という）合掌して儀式に臨む王の姿が最も大きく表現されている。

この原則を諏訪山古墳に当てはめる。すると、権力を有していたのは、この埴輪に表現された巫女であった可能性が高いのだ。若狭説では、諏訪山古墳周辺の一帯は巫女王によって治められていたのではないかと、いうことであつた。

諏訪山古墳
高崎市下里見町 郷見神社裏
全長14m 円墳
6世紀初頭築造 横穴式石室
埴輪が数体出土

私の祖父母は諏訪山古墳の近くに住んでいる。そこで、この興味深い話を伝えたところ、とても驚かれた。このような諏訪山古墳の背景については、初めて聞いたという。「巫女王の古墳かあ。でも、郷見神社として今も大切にされているね。」

その通りだ。諏訪山古墳の被葬者が本当に女性だったのか、どんなに学術的証拠を積み重ねても、正直なところ100%の真偽はわからない。だが、今も地域の人々の信仰と崇拝の対象として、聖域の郷見神社及び古墳が重要視されていることに変わりはない。

「巫女の王、昔から群馬はかかあ天下だったみたい。」



図4 群馬のかかあ天下 「かかあ天下像」
甘楽町歴史民俗資料館 〈日本遺産登録〉

地域の人々を守るために、懸命に働いていたであろう巫女王。横穴式石室の立派な古墳に葬られ、生前を想起させる精巧な埴輪が作られたことから、人々に慕われていたことがうかがえる。地域に根ざして「大切なものたち」を守ろうとする、かかあ天下の真髓ともいえる姿勢は、現在までずっと受け継がれている。

【考察】 ～諏訪山古墳の巫女王～

諏訪山古墳の埴輪から、私はさらに想像を膨らませた。「巫女王」といえば、邪馬台国の女王・卑弥呼である。卑弥呼は占いの一種の「鬼道」をもとに政の方針を決めていたそうだ。そして、その結果を民に伝えて実務的な政治を行ったのは、血縁の弟であったと、**魏志倭人伝**に記載されている。（これをヒメ・ヒコ制と言うそうだ。）この記載から考えるに、巫女が直接的に政治を行ったとは考えにくいのではないだろうか。神に仕える役目と国の民を養う役目、双方をこなすのは重責だったと思う。



図5 卑弥呼肖像画

諏訪山古墳の主も、同様だったのではないだろうか。つまり、

- ①最も大きな埴輪に表現された巫女王が占いや儀式を通じて一帯を治めた。
- ②上級の格好をした男性の埴輪に表現された人物が、巫女を補佐したり他の地域との折衝をしたりといった業務を行った。ということである。

いずれにせよ、上野国にも巫女王として為政を行った女性リーダーが存在した可能性は大変高い。

(2)埴輪に表現された女性の姿

人物埴輪において、女性は「巫女埴輪」として頻繁に登場する。

埴輪群像は、(1)でも触れた通り被葬者の生前の姿を表しているとされている。そのため、当時の政治の中心であった儀式の様子はかなりの高確率で作られているのだ。権力者からすれば、正当な巫女と儀式を行うことで支配を盤石なものにしていたという考え方もできる。

だが、稀に「巫女埴輪」以外の女性埴輪も見つかっている。図6は、伊勢崎市から出土した埴輪「盛装女子」こと女子立像である。国指定重要文化財に指定され、東京国立博物館の埴輪のシンボルでもある。

この埴輪は、とにかく華やかだ。豪華絢爛な装いで、さらに頭から爪先まで全身を装身具できらびやかに飾っている、実に美しい埴輪である。



図6 盛装女子埴輪

〈国指定重要文化財〉

- ・髪…大きく豊かに結い上げる。古墳島田の髻を櫛と鉢巻きで留める。
- ・上着と裳…紅と白で彩色された鱗状と縦縞状文が施される。

文様には呪術的な魔除けの意味合いがある。

- ・装身具…精巧に表現された、玉類を連ねた耳飾り・首飾り・腕飾り。

腰には刀子という小刀らしきものを下げている。

ゴージャスな装いと、まっすぐ前を見据える彼女の凛とした表情からは、輝くばかりの麗しさがにじみ出ている。

人物埴輪には半身像と全身像があるが、全身像は少数であり女子像はほとんどない。さらに、この埴輪ほどの盛装の表現は稀である。このことから、これは特別な職掌または高位の女性を写した埴輪と考えられて

いる。また、特に目立った動作をせず直立不動なのは、葬送の列に参加している様子、またはなにかの儀式に参加している様子を表わしているという説が挙げられているものの、よくはわかっていないようだ。

このように、当時の上野国にはこの埴輪に表現されたような高貴な人物が存在していたようだ。

【考察】 ～「盛装女子」の身分は？～

盛装女子埴輪が出土した地点（豊城町）から数km西には、墳丘長125mの大型前方後円墳・お富士山古墳がある。お富士山古墳からは「長持形（ながもちがた）石棺」が見ついている。この長持形石棺は別名・王家の石棺だ。大和朝廷による畿内の大王級の古墳にのみ採用されていて、高度な石材加工技術を要するのである。（大小様々な石の板を組み合わせる。）畿内以外では、同じく群馬県内にあり東日本最大の古墳である太田天神山古墳にも使用されている。このことは、東国・上野国がいかに畿内勢力から重要視されていたのかを示す大きな証拠である。（昨年度の私の研究「時代を映す鏡」で取り上げた三角縁神獣鏡と同様に、長持形石棺も上野国の繁栄を伝える重要な考古学資料である。）

お富士山古墳
伊勢崎市安堀町
全長125m 前方後円墳
5世紀前半築造
長持形石棺が特徴



図7 お富士山古墳の長持形石棺

お富士山古墳は、5世紀前半の築造であり、盛装女子埴輪のつくられたとされる6世紀までには、大きな時間の隔りがあるものの、伊勢崎の地が大和朝廷から重要視されていたことを示唆していると思う。

当時の伊勢崎の状況も踏まえて、盛装女子の身分を考える。

- ①王の未亡人 ②王の後継者（娘など？） ③大和朝廷の人間（訪問か婚姻か？）
あくまでも私の予想だが、盛装女子は相当の身分の高い女性であったはずである。

(3)古墳の埋葬者としての女性

古墳は、墓である。遠い昔にこの地で生きた人の命に、黄泉の国での永遠の幸福を願って築造されたものである。そのため、古墳は古墳時代の人間の人生の記録を伝えているのである。

出土品から、埋葬者の性別や状況を知ることができるケースはよくある。

①男性の場合

武器の出土が多い。（甲冑、大刀、鉄鏃 etc..）

ここで、私がこの研究を進める上で参考にした2つの講演会のうちのもう片方が関わってくる。2つ目の講演は、大刀についてだ。講師は、東国文化の発信拠点の一つである群馬県立歴史博物館の特別館長である、右島和夫先生だ。講演内容は「古墳時代における儀仗刀の成立」。歴史博物館にて実施中の企画展「戦国上州の刀剣と甲冑」の関連行事として、古墳時代の刀剣についての貴重なお話を拝聴することができた。

大刀は、まぎれもなく武器であり殺傷能力を持つ。だが、古墳時代にはその存在意義にある変化が生まれた。もちろん、武器としての使用は継続されたが、それ以上に「大刀を持っていること」に価値を見出すようになったのだそう。きらびやかな装飾大刀は、多くの大型古墳から出土している。また、大刀形埴輪もつくられているのだ。つまり、王の権力の象徴として、大刀は一定の役割を果たしていたようだ。



図8 装飾大刀（綿貫観音山古墳出土）〈国宝〉

②女性の場合

装飾品の出土が多い。(首飾り、耳飾り、腕飾り etc.. ガラス玉や白玉、管玉、そして勾玉を含むことも)腕飾りが出土した場合、基本的にその古墳は女性が埋葬されている。埴輪からもわかるように、男性は腕飾りをしていない。だが、女性、特に巫女は高確率で腕飾りの「手玉」を身につけているのだそうだ。

また、女性が装飾品を常日頃使っていたことを裏付ける考古学資料がある。渋川市にある「金井東裏遺跡」では、榛名山大噴火の火砕流に飲み込まれた4人の古墳人の人骨が発見されている(詳しくは一昨年度の私の研究「古墳人たちの生活辞典」を参照)。その中の一人、通称「首飾りの古墳人」は、30代半ばと推定される女性だった。そして彼女は、管玉とガラス小玉を連ねた首飾りを身につけていたようだ。



図9 首飾りの古墳人

他にも、古墳の埋葬者が女性である場合の特徴はある。最後に一つ、「馬」の例を挙げる。右の図9は、上野国のお隣・下野国(現栃木県)の甲塚(かぶとづか)古墳の馬形埴輪である。この馬の鞍には、珍しい設備の表現がある。それは、地面に対し平行につけられた横長の突起。これは、女性が馬の鞍に横座りするためのステップなのだそうだ。すなわち、この飾り馬は女性首長のために使われていた、ということである。



図10 馬形埴輪
(甲塚古墳出土)

弥生時代から古墳時代前期にかけては、首長として埋葬される人物の3割から5割が女性だったという説もある。また、初期の古墳では1基に複数の埋葬者がいた場合もあるそうだ。今後、さらに女性の古墳の存在が明らかになるかもしれない。

結論① 古墳時代の上野国には、政の分野で権力を持つ女性が、少なからず存在していた。これは儀式的巫女だけにとどまらないため、男女ともに為政の権利は得ていた。

3.男女分業 ～互いの仕事を尊敬しています！～

仮説② 男女、それぞれの身体的特性を活かして、仕事は分担していた。

縄文時代において、人々は集落で仕事を分担して生活をしていた。狩猟と採集という生活スタイルも影響していたのだろう、肉体的労働要素の強い狩猟は男性が、採集や調理は女性が担っていたようだ。

では、古墳時代ではどのようになっていたのだろうか。弥生時代に稲作が伝来したことにより、狩猟と採集という不安定な食料自給は改善され、毎年コメが得られるようになった。また、それまでのムラ単位の小さな集落から、いくつかのムラが合併しての大きなクニとなっていた。それに伴い、身分の格差が生じてきた、と考えるのが自然である。

(1)機織り〈古墳時代〉

機織りは、衣食住の「衣」の営みだ。そして、機織りは古来より「女性の仕事」として扱われてきた。

その背景には、男性の役目（狩猟、農耕、警備防衛）があったこと、伝来元の中国では男尊女卑の制度が既にあったことなどが挙げられている。

機織り技術は縄文～弥生時代に中国から日本に伝来し、各地へ拡大していった。この時の、初期の機織りは「原始機（げんしばた）」という設備である。原始機は、必要最小限の設備だけでできていて、織る人の身体を使って糸を固定しながら織り進めるのである。アイヌ民族では、長い間をかけて原始機が独自の発展を遂げていったそうだ。

その後、古墳時代中期に進化した機織り設備が渡来する。それが「地機（じばた）」だ。枠組みを持つことで、負担が軽減されるとともに長い織物も可能になった。

原始機と地機については、それぞれ日本で1例ずつ、埴輪としての出土がある。（図11,12,13）いずれも、先ほど女性用の馬形埴輪で取り上げた、**下野国の甲塚古墳**からだ。



左から順に
 図11 原始機の埴輪
 図12 地機の埴輪
 図13 地機の埴輪
 復元イメージ

機織りは、古代において重要な産業であったことがわかる資料は他にもある。それは、**石製模造品（せきせいもそうひん）**だ。石製模造品とは、古墳時代の人々が日常生活の営みの上で使っていた道具の、石製ミニチュアである。**祭祀におけるの供物**として利用された。作られたものとしては、刀子（とうす）という小

刀や斧など、日常の必需品から農具、工具まで多岐にわたる。その中でも、機織り機の一部を表した模造品はいくつか見つかっているそうだ。群馬県内からは、**中筋遺跡**と**南新田稻荷山古墳**の2ヶ所から見つかっている。



図14 南新田稻荷山古墳出土 石製模造品

(2)機織り〈律令国家〉

古墳時代の終盤に「高機（たかはた）」が伝来すると、織物生産は大きな変革を迎えた。まず、生産性が向上した。高機は、操作は難しいものの身体能力はあまり必要としない。そのため、それまではなかなかの重労働であった機織りだが、長時間作業が可能になったのである。次に、複雑な模様が織り込めるようになった。そのため、大和朝廷は美しい布を求めるようになる。そして、織物の素材に変化があった。高機は、絹織物に適している。

	原始機	地機	高機
時期	弥生～古墳後期	古墳中後期～近現代	古墳中後期～近現代
素材の適性	麻	麻、(近世～木綿)	絹、(近代～麻、木綿)
身体の運動	◎	○	△
技術の特徴	生活技術の伝習〈身体感覚〉	〈日常衣料〉	専門技術の教習〈工房の管理〉〈上位の衣料〉
	麻／腰機／女性 「日常衣料－生業活動」「貢納物－生産労働」		

律令国家の形成とその支配の確実化により、人々は税を納めるようになる。これが、「租・庸・調」だ。租は生産された米を、調は各地の特産品を、庸は布を納めるのだった。

図15 古代の機の比較 「古代日本の女性と腰機」東村 純子 より引用

このうち、庸と調は織物に関わる（ことが多い）。この織物生産を担ったのは、各地の女性たちだった。律令国家体制は中国の制度をもとにしているため、一部男性優位な点が見られる。租は全国民に課されるが、庸や調は男性だけである。そして、建前上は男性が納める布の税は、女性たちによって作られていたのである。

庸や調は、厳格に布の長さや幅が定められていた。だが、各地の人々は規定通りに良い布を献上していた。つまり、各地で高度な機織り技術が広まっていることが読み取れる。

【考察】 ～上野国での機織りは～

上野国の隣の下野国からは機織りをする埴輪が出土している（国内でたった1例！）。そして上野国内でも、石製模造品のように機織り産業の存在を示す遺物が発見されている。これらの理由から、東国・上野国で機織り産業は行われていた、と断言して良いと思う。

その後群馬県は、養蚕→製糸→布生産 までの全ての工程が県内で行われるようになる。群馬県民おなじみの「上毛かるた」では、き：桐生は日本の機どころ と め：銘仙織出す伊勢崎市 として、2種類の美しい布が扱われている。（考古学的に裏付ける資料がないため、あくまで私の予想にすぎないが）古墳時代の東国文化繁栄の地としての機織りと、律令国家の税として献上された機織り、これらは後世の群馬の機織りに繋がっていったのではないだろうか。

ちょうど布の1本1本の糸が織り込まれていくように、機織りに従事した人の人生が、布に織り込まれていく。それらは長い間ずっと続き、そして「群馬の機織りの歴史」という1枚の布になる。そこには、確かな東国機織り技術の継承と、自慢のかかあ天下の働き者気質があったのだろう、そしてその機織りの歴史は、現在もなお織られ続けて、未来へつながっているのだろう。



き 桐生は日本の機どころ



め 銘仙織出す伊勢崎市

左から順に

図16 上毛かるたの「き」

図17 上毛かるたの「め」

結論② 古代の機織りに代表されるように、男女の仕事は自然に分かれていた。

だが、いずれの仕事も社会に必須なものであり、互いにその重要性を認め合ったと考えられる。

4.上野三碑から ～女性と家族～

仮説③ 古代から、女性は家庭で大きな役割を果たしていた。

ユネスコ（UNESCO 国連教育科学文化機関）の「世界の記憶」に登録された「上野三碑」。奈良時代の上野国の様子を今に伝える貴重な資料だ。その中から、女性についての記述をピックアップして取り上げる。

(1)山上碑

山上碑は、681年に建てられた、完全な形ののこる石碑としては日本最古。放光寺（山王廃寺）の僧であった「長利（ちょうり）」が、母の「黒売刀自（くろめとじ）」の死を悼んで建立した。隣には、黒売刀自が眠る山上古墳がある。

(2)金井沢碑

金井沢碑は、726年に建てられた。当時の上野国の一大勢力であった「三家(みやけ)」の一族が、結束を誓ったものだ。ちなみに、この三家一族は、山上碑の長利の子孫である。

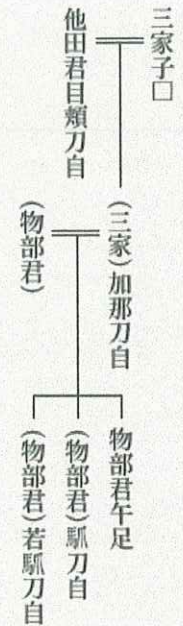
石碑には、女性の名も多く刻まれている。このとき、注目すべき点として、**女性の姓が夫と異なる**ことだ。古代においては、婚姻後でも妻は実家の姓のままであった。古代の人々が家族の結びつきを重視していた事実がうかがえる。

また、女性の名には「刀自(とじ)」という尊称が使われている。特に、一族の主人の妻(=女主人)は「家刀自(いえとじ)」と呼ばれ、一家を支配する者として特別視されていた。



図18 上野三碑 〈世界の記憶・国指定特別史跡〉

図19 金井沢碑における三家一族の家系図 →



結論③ 古代、家族の絆は何よりも大切なものとされていた。

そして、家庭における男女平等は、現在よりもよっぽど高水準であった。

5.働く女性の姿 ～律令国家の元祖・キャリアウーマン!?!～

2022年8月、律令国家の労働についての新たな資料についての興味深い報道があった。それは、奈良時代の「木簡」である。そこには、奈良・平城宮で働いていた女官(女性の役人)の勤務評価が記されていた。この女官はなんと!年間329日も出勤していたそうだ。

図20 発見された木簡 →

都で働く役人は原則、300日程度の勤務が多い。つまり、この女官は規定を大幅に上回る出勤日数の長時間労働をしていたようだ。だが、この女官は59歳とかなりのベテラン。そのため、過酷な労働を押し付けられていたわけではなく、天皇の近くで働いていたと考えられる。

【考察】 ～女官という職 上野では?～

たった1つの木簡から、1人の女官の働きぶりが伝わってくる。この女官はきっと、都で働くことにやり甲斐を感じていたのだろう。そして、この元祖キャリアウーマン女官は、多くの役人に慕われていたのではないだろうか。

聖徳太子が冠位十二階を定め、能力で仕事ができる社会の基礎を築いた。まさにこの女官は、己の能力を武器に働いていたのだと思う。ジェンダーに縛られずに働ける、平城京は現代にも通じる普遍の概念を伝えているはずだ。

奈良時代の上野国にも、中央からの命により「上野国府」が設置されていた。現在、その場所を特定することはできていないが、前橋市総社の辺りにあったという説が有力だ。

もしかしたら、上野国府にもバリバリ働くかあ天下キャリアウーマンがいたのかもしれない。

図21 上野国府の印



6.感想 ～古代社会から学ぶ～

今回の研究では、古墳が盛んに築造された東国文化の絶頂期から、律令国家の支配が及んだ奈良時代まで、長い期間を研究対象とした。多くの切り口から「古代のジェンダー」を探り、結論としてたどり着いた一つの答えがある。いつの時代も、人々はいきいきと活躍していた。もちろん、女性も。様々な場面で活躍していたのだろう。たくさんの遺跡や資料が、古代に生きた人々の生命の息吹を伝えてくれる。

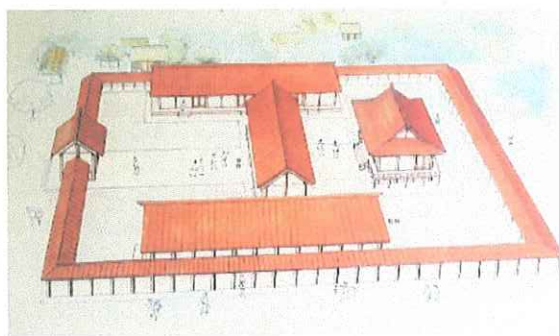


図22 上野国府推定復元図

そして、気づいたことがある。ジェンダーについて、古代のほうが今よりも生きやすい世の中だったのかもしれない。確かに現代は、様々な知識にあふれ制度は整っている。だが、意識面ではどうだろう。古代は、男女の区分によるしがらみは今よりも少なく、寛容だったように感じる。そう思いを巡らすと、古代から繋がってきた私の遺伝子がうずく。男女不平等が叫ばれる現代、こんなはずではなかった、と。

数値データからも分かる通り、現代日本の男女平等への道のりは長い。この永遠のような課題の突破方法は？ それは、過去を生きた人々が教えてくれる。技術の発展により便利な生活を享受している今だからこそ、過去を振り返る時間が大切なのである。先人たちの功績は、随所に隠れている。それを見つけ出して考察し、未来のヒントとしてつなげることが私達の使命だ。

直面する社会問題の中には、古代にヒントがあるものは多くあるはずだ。例えば、盛んに議論が勃発している「選択式夫婦別姓」について。金井沢碑からわかるように、奈良時代においては夫婦別姓が当たり前だったようだ。時代の流れによって失われた風習もあるということに気付かされる。

「覽古考新(らんここうしん)」という言葉がある。過去を振り返ることで未来をつくっていかうという強い意志の現れた四字熟語だ。先人たちの生きた証を知り、未来を創造していく決意。今を生きる私達に必要なのは、この精神だと思う。

古墳時代の地域を統率した女性首長、経済を発展させる立役者となった女性たち、家族を優しく包み込む刀自たち、仕事に誇りをもって向き合う女官、この研究で登場した女性たちに共通することがあると思う。それは、自分の中にぶれない強い芯をもち、そして周りの人のことを考えられる人だった。これこそが、真のリーダーの姿ではないだろうか。長い時代を経た今でも手本とすべき姿勢だ。

私も、「真のリーダー」になりたい。古代の女性たちを手本として、リーダーとしての素質のある人間になりたい。そのためにも「覽古考新」。歴史を知り、未来をつくっていききたいと思う。

7.参考文献

【講演会】

- ・「埴輪は語る」 2022年7月23日 講師：若狭徹先生
場所：高崎市市民活動センター・ソシアス
- ・「古墳時代における儀仗刀の成立」 2022年7月31日
講師：右島和夫先生 場所：群馬県立歴史博物館

～貴重なお話をありがとうございました～

【書籍・パンフレット等資料】

- ・「東国文化副読本」 群馬県 平成26年度版・令和2年度版
- ・「HANI-本」 群馬県 (監修：右島和夫・若狭徹)
- ・「古墳大国群馬へのあゆみ」 (群馬県立歴史博物館第103回企画展 展示図録) 群馬県立歴史博物館



図23 参考資料の一部

- ・「古墳人、現る 金井東裏遺跡の奇跡」(講演会の資料) 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- ・「上野三碑」 高崎市 ・「解明! 古代群馬の中心地 上野国府跡」 前橋市教育委員会

【インターネット】

「世界経済フォーラムが「ジェンダー・ギャップ指数2021」を公表」 内閣府男女共同参画局総務課

https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2021/202105/202105_05.html

「女性論」の考古学 水野正好 奈良大学

http://repo.nara-u.ac.jp/modules/xoonips/download.php/AN00181569-19871200-1016.pdf?file_id=580

「百舌鳥古墳群の時代～古代における女性～」対談記録 堺市

<https://www.city.sakai.lg.jp/shisei/jinken/danjokyodosankaku/kaigi2009/hokoku2009/bunkakai/kodaijosei.html>

「古墳時代、女性首長多かった...はにわで考えるジェンダー」 朝日新聞デジタル

<https://www.asahi.com/articles/ASNC57DBXNB7UDCB00Q.html>

「古墳時代の方が...」 東京新聞TOKYO Web 私説・論説室 <https://www.tokyo-np.co.jp/article/71842>

「下里見諏訪山古墳」 古墳マップ <https://kofun.info/kofun/5584>

「埴輪 盛装の女子」 e国宝

https://emuseum.nich.go.jp/detail?langId=ja&webView=&content_base_id=100577&content_part_id=0&content_pict_id=0

「埴輪 盛装女子」 文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/534389>

「埴輪 盛装女子」 ジャパンサーチ <https://jpsearch.go.jp/item/cobas-107821>

「遺跡に学ぶ No.43 金井遺跡群 授業に使える古墳時代の"なぜ?"」 群馬県埋蔵文化財調査事業団

<http://www.gunmaibun.org/excavation/koukogaku/manabu/data/43.pdf>

「はたおりの歴史展 -古代の織物生産を考える-」 カルチュアはっとり 大阪府文化財センター

https://www.occh.or.jp/static/pdf/data/booklet/H18_hataori.pdf

「古代日本の女性と腰機」 東村 純子 岡山大学文学部プロジェクト

https://ousar.lib.okayama-u.ac.jp/files/public/5/56889/20190703103326267377/rpkj_2019_036_040.pdf

「栃木県下野市 甲塚古墳出土機織形埴輪」 下野市

<https://www.city.shimotsuke.lg.jp/manage/contents/upload/5821824666a85.pdf>

「小さな石のものがたり 石製模造品からみるぐんまの古墳時代」 高崎市立かみつけの里博物館

<https://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014010800084/files/dai26kaiotamesi.pdf>

「上野三碑」 高崎市 <https://www.city.takasaki.gunma.jp/info/sanpi/>

「年間329日も出勤」平城宮跡で女官の勤務評価の木簡出土」 NHK NEWS WEB (奈良)

<https://www3.nhk.or.jp/news/nara/20220803/2050011253.html>

「上野国国府跡」 上野国分寺 <http://kouzuke-kokubnji.sakura.ne.jp/kokufu/kokufu.htm>



自称: 古墳大好き中学生が行った最新の古墳は、甘楽町の笹森古墳です♪ 神社の聖域と大きな古墳!



最後までお読みいただき
ありがとうございました
これからも、貴重な古墳や埴輪、副葬品を
未来につなげる使命を
果たしていきたいです!

←私の最推し埴輪・跪坐の男子(ひざまづく男)